2023 年ハローアルソン・フィリピン医療ボランティア現地活動報告

日時：2023 年 6 月 7 日～10 日
場所：フィリピン共和国首都マニラ市近郊のスラム
参加者概要

歯科医師：19 名　　看護師：1 名
歯科衛生士：6 名　　一般参加者：11 名
歯科技工士：1 名　　高校生：3 名
歯科助手：1 名　　合計　42 名

6 月 7 日

出発の日

成田空港集合

約 3 年ぶりのハローアルソン・フィリピン医療ボランティア現地活動が始まる。
今回は世界情勢を鑑み、定員を設け全国から 43 名の応募を頂いた。しかし、出発直前、一般参加者の峯岸さんが急遽体調不慮の為不参加となり、成田空港には全国から 42 名の参加者が集まった。

搭乗手続き前、事前に事務局が用意した恒例の「10 キロ物資」を今回は茨城県支部の山川さんが会社の倉庫に保管し、早朝空港まで届けてくれた。

これは通常飛行機には一人につき 2 つまでの荷物を預けられる。そのため参加者は、一つは自分の荷物、もう一つは歯ブラシやタオル・固形石鹸などを詰めた「10 キロバック」を自分の荷物として預け、出来るだけ多くの物資を現地運べる作戦を毎年とっている。一人につき 10 キロ×42 人、相当な物資の量だ。

空港内の一角でハロアル現地活動最初の朝礼が始まった。

各班に整列をし、会長　林春二　先生の挨拶、事務局連絡、そしてマニラ空港到着時の注意事項が伝えられた。

新型コロナウイルス感染の拡大により 3 年間延期となった現地活動。

今年はどんな感動や出会いがあるだろうか・・・。

マニラ空港到着

ニノイ・アキノ国際空港に到着した。

現在、コロナ感染防止対策として各国が様々な規制をとっているが、フィリピンでは出入国の際にあらかじめ携帯電話に専用のアプリに必要な情報を入れなければならない。

何とか全員検査を通り、いよいよ空港から出ようとするとき、何と税関で数個の 10 キロ物資が止められた。

職員が言った。「この袋の中身は何か。」「場合によってはこの袋一つ、一つに税金を支払ってもらうことになう。」

全くの寝耳に水だ。なぜなら既に数十個の物資（袋）は税関を通過している。そして過去 17 年間の間にこのような事を言われたことがない。

私たちは職員に事情を説明したが通らない。私は彼らに「私たちは日本からきた医療ボランティア団体だ。そしてこの国のロータリークラブと一緒に 17 年間活動をしている。」と説明したが、「それではロータリークラブとやっていることを証明しろ。」と言う。私はロータリークラブの代表でもあり私の長年の友人でもあるリッキー氏に連絡を取り彼の ID の写真を所得し、それを見せようやく解放された。

だいぶ時間がかかった。過去一度もそんな話題にすらならないことが何故と思うが、これもまた異国の地フィリピンだからだろう。その時、私はふとあることを思い出した。

実はこの 6 月の活動が決定した 2 月の調査の際、私はある書類を現地チームから手渡された。それを万が一の為私は携帯で撮影し一応保管しておいたのだ。私は職員に見せた。

「もしかしてこの書類が必要だった？」彼は苦笑いをしながら「ドクター、あなたのこの書類一枚ですべてが解決していました。・・・。」

それは紛れもなく今回の活動を正式に示す許可書だった。

外に出るとすでに 6 月雨季のマニラの洗礼スコールが激しく降っていた。
気温 32 度、滝のような大粒のスコール。バスや車に荷物や物資を入れるが皆さんびしょ濡れだ。そしてこれからマニラ市内にあるスラムにて物資配布の活動を行う。連絡によると既に私たちがやってくるのを 2 時間以上待っているという。

バス内で最終点呼を行い、いよいよ今年の活動が始まる。

物資配布活動：Brgy:701 Zone 77 District V 1994 A. Mabini St Malate Manila

今回の会場はマニラ市中心部にある小規模のスラムだ。

約 5,000 人の住民が住み、約 1,800 人は 12 歳未満の子供たちだ。ここでの就学率は約 7 割、住民たちは主にトライシクル（乗り合いのバイクタクシー）や建築関係で 1 日の収入は約 300 ペソ～400 ペソ（1 ペソ約 2.5 円）。現在マニラ市の一日の最低賃金は 570 ペソとされているので、かなりの貧困地区と言える。ここでは 1 日 2～3 食の食事はできるが、主にお米だけを食べ、収入がある時に 1 品のおかずを買えれば良い方だという。

このスラムは都会にあるため独特の支援があった。それは新型コロナウイルス感染が拡大した時、まず政府は住民の外出禁止令を出した。そのため住民たちは職を失い収入が激減し食べる物もままならない状況となった為、政府はマニラ市内においてフードバンクを設立し、月 1 回各家庭に食べ物や飲み物の配給を行った。このような行政の政策は都会の中のスラムでしか得られない支援であるといえる。

少しスコールも弱まって来ただろうか。既にバランガイ（集落）の中心にあるバスケットコートには大勢の住民たちが私たちの到着を待ちわびていた。私たちは事前にマニ

ラチーム（マニラ・ラハ・ソライマン・ロータリークラブ）が準備をしてくれていた物資を一人ひとりに手渡していった。皆、とても嬉しそうに笑顔で手を振ってくれる。特に歯ブラシや固形石鹸などの衛生キッドは収入に余裕がないため、買うことができない。今日食べることに困窮するスラムでは本当に高価な品であることを改めて感じた。

全体ミーティング

　ホテルに到着し荷物や物資、器材、そしてこのホテルで預かってもらっている器材をすべて会議室に運び、いよいよ明日からの医療奉仕活動に向けての全体ミーティングが始まる。

　参加者一人ひとりが挨拶をし、そして現地統括責任者今西先生から細かな注意事項が伝えられる。

　今回は 3 人の高校生が参加をしてくれた。

　実は今回の活動は 40 名と人数の制限を設けた。これはコロナ禍において約 3 年ぶり

となる活動のため私たち、そして現地チームもまずはバス 1 台の人数から再開し、高校生の参加を延期とすることに同意した。しかし、それでも参加を熱望した 3 人の高校生から連絡をもらい会としては熟考した結果参加を認めたのだ。

全体ミーティングの際、会長林先生がおっしゃった。「このような状況でも参加をして下さった皆さんに心から感謝をします。」運命的に出会った 42 名。まさに奇跡の出会いに心から感謝をした。

器材チェック

私たちの会では主に 3 つの方法で器材を準備する。

1， 各担当医院から現地にもってくる器材（主に大型の物）

2， 各参加ドクターが持参する器材（グローブ、切削器具等）

3， ホテル倉庫内に保管しておく器材（バケツ、コップ、外科器具等）

これらを活動前夜に全てまとめ、各治療ブースに分けてそれぞれの在庫を確認する。これが本当に大変だ。この担当は岡山県支部　木本先生だが彼は 1 年間この器材のために全ての準備と管理を行う。彼の指示のもと全医療従事者が協力をしてチェックにあたる。外科器具、保存器具、クリーニング器材、薬剤、処方薬、その他の材料等が器材部屋に運び込まれ全員で振り分ける。そして歯科医師、歯科衛生士、歯科助手たちがそれぞれのブースの注意点を話しあい、ようやく全ての準備が整った。

さあ、明日からいよいよ 3 年ぶりの医療奉仕活動が始まる。

6 月 8 日　医療奉仕活動初日

場所：Sitio Wawa covered Court MH Del Pila St. Wawa San Rafael Rodriguez Rizal

朝食会場には既に数名の参加者が来ていた。皆 2023 年モデルの「ハロアル T シャツ」を着用している。実はこのホテル。朝食開始時間は AM6 時となっているが、私たちがボランティア活動に行く場所がかなり遠方のため、急遽活動の 2 日間は 30 分早く朝食会場を開けてもらった。ホテルのスタッフの皆さんには感謝しかない。

器材部屋から全員で全ての器材をバスの中に運び、配布する物資は活動場所まで先導してくれる消防車、救急車の荷台に詰め込む。

ホテルの外にはすでに会場まで先導をしてくれるマニラ警察の黒バイ 2 台が待機していた。マニラは世界的に見てもとても渋滞が多い所で、通常なら 30 分程度で着く場所も優に 1 時間 30 分以上はかかってしまう。そのため、活動中の移動の際はマニラ警察に依頼をし、黒バイの先導をお願いしている。

日本では白バイだが、フィリピンでは白バイと黒バイが存在しこの黒バイこそが強力

な権限を持ち主に政府の護衛や高官の先導などの任務にあたる。そのためたとえ渋滞となっていても全ての信号を止め、私たちの前の車をどかしながら道を開けてくれる。

私は今日からずっと護衛をしてくれる彼らに日本から持ってきた日本製のバイク用のマスクをプレゼントした。けたたましいサイレンが鳴り響き、いよいよバスが出発した。目指すは「パヤタス」。

ここはフィリピンで最も貧しいとされるエリアの一つ、「スモーキーヴァレー（ゴミの谷)」がある。1970 年頃から 1995 年までマニラ市内のゴミの投棄場とされていた地区であり、ホテルから約 1 時間 15 分の道のりだ。天気は晴れ、いや、劈(つんざ)くような強い日差しが既に今日の活動の過酷さを予想しているようだった。

スモーキーヴァレー　：　ゴミの谷に住む人たち

マニラの喧騒から車で北に 1 時間半、少しずつ町の風景が変わり周囲は深い渓谷に覆われている。

ここは私が初めて団長に任命された年に訪れた思い出の地だ。あの日は朝から雨が降り、むせ返る臭気と町中を走るゴミ収集車、大人から子供まで大勢の住民が毎日 3000 トン以上マニラ市内から運ばれるゴミの中からお金に換金できるものを拾い集め生活をしている「スカベンジャー」（ハイエナなど腐肉を食べる動物を意味する差別用語）と呼ばれる人たちが大きなゴミ袋を抱えながら歩いていた。

現在は封鎖され、住民の数は減っているようだが、それでもフィリピン国内でも最も貧しい貧困地区には変わりはない。あれから 15 年。コロナ禍で 3 年間の活動延期の中、再出発にふさわしい思い出の地に私は言いようのない興奮と懐かしさを感じていた。

バスが到着した。既に現地メンバーやバランガイのメンバーが大勢待っており準備が進んでいた。しかしそこには普段の活動ではあまり見ない、軍服を着た陸軍兵士、そして Philippine Coast Guard　と呼ばれるフィリピン沿岸警備隊 が小銃を抱えて待機していた。現地リーダー・リッキー氏が私を呼び真剣な表情で言った。「セキ、聞いてくれ。実はこのエリアで 2 週間前に NPA（新人民軍）と政府軍との間で大規模な衝突が起きた。現在は沈静しているが、安全を確保するために軍の兵士と沿岸警備隊がこの活

動を守る。だから絶対に決められたエリア外に単独では出ないで欲しい。」

私は彼と 15 年の付き合いになるが、彼のこのような表情は今まで見たことがない。

私はその旨を参加者に伝えた。皆一様に緊張度が増し、バスから物資や器材を運ぶ際、周囲には兵士や警備隊の護衛がいるという物々しい雰囲気の中、会場の設営が始まった。

医療奉仕活動開始

全ての準備が整った。会場は集落の中心に位置するバスケットコートだ。フィリピンではバスケットボールが盛んであるためどのバランガイにもバスケットコートがあり市民の憩いの場となっているが台風などの災害時には住民の避難場所や選挙の時の集会所ともなっている。

入り口にはすでに大勢の患者さんが列をなしている。聞けば先頭の住民は 2 時間前から順番を待っているという。

受付で問診表を書き、検診ブースに患者さんがやってきた。

今回のブースは「検診」「抜歯」「保存（虫歯の治療）」「クリーニング」「義歯」「消毒」

そして「物資配布係」「患者誘導係」に分かれ、42 名の参加者全員にそれぞれの担当が振り分けられた。

スラムでの治療

スラムでの治療は正に「一期一会」だ。

今日この日を逃せば治療を受けることはできず、私たちも再びこの場所、目の前の患者に会うことはできない。なぜなら、私たちハローアルソンの活動は今やフィリピン中のロータリークラブを通じて広まり、様々な地区から活動誘致の依頼が現地チームにやってくる。そしてそのオファーを受けいれられるのは実に 8 年後となっている。

そして日本とは決定的に違うのは「痛みを取る治療」それは「抜歯」しかないということだ。日本では痛みを取りながら継続的に通院をして様々なやり方で治療ができる。

しかし今日食べることができない彼らにとって歯ブラシを買うことなど到底できない。そのためスラムでは痛みがある場合や今後大きな感染症を引き起こすような歯は全て抜歯となる。

このエリアでもそのほとんどが抜歯対象である。しかし、まだ 10 代の子供たちが前歯を失い、人間の最も強い咬合力を司る奥歯を失うことは彼らの人生にとって大きな影響を及ぼす。そのため私たちは何とか可能な限り歯を残すために保存治療（虫歯を治す処置）を率先して行う。

その為には日本と同様様々な器具や材料が必要となるため、参加をされる各先生方にできるだけ器材の提供とご協力をお願いしている。

また、歯科衛生士による「クリーニング」はとても大切な治療だ。

スラムの人達は 100%歯科医院で誰かに歯の掃除をしてもらうことはない。そのためお口の中には沢山の歯石が付着し、その結果重度の歯周病を引き起こし抜歯に至ってしまう。歯科衛生士たちはクリーニングによって歯石を取ることは勿論のこと「何故そうなったか」を説明し、歯ブラシの大切さ、やり方をお話しする。長年放置された歯石を

取ってもらっている時の住民たちの顔は本当に嬉しそうだ。

そして「義歯製作ブース」通称「技工ブース」だ。

歯を失う治療をあえて「悲しみの治療」と呼ぶなら、ここは失った歯を入れ歯によって再び噛めるようにする「希望の治療」だ。今回歯科技工士が 1 名の参加だった為、製作する数には限界がある。数百人、数千人の人達が熱望する治療だが現実的には時間の関係上一日、約 5 名しか製作ができない。その奇跡的な治療を受ける患者さんたちは本当に心の底から笑顔で感謝をしてくれる。

その他、消毒ブースでは全ての器具の洗浄や消毒、準備を数名のメンバーが担当するが鋭利な器具や出血を伴った器具の取り扱いはとても危険であり、最も注意が必要なブースだ。また、検診で振り分けられた患者を各ブースに誘導する係も大変重要である。このように、現地での治療は医療従事者だけではなく参加者全員が一つになって初めて成功する。

岸壁に作られたスラム

皆が活動をしている中、私は写真班の岩井さんと一緒にこのエリアの住民たちの様子を見学に行った。

全員に見てもらいたかったが、このエリアの危険度は高く現地チームから 2 名のみ許可が得られた。

私が会場を後にし、集落へ向かうと既に周りには武装した兵士が数人護衛に付いた。周りの住民たちも何事かと思いながら私を見ているが、その眼は皆優しそうで、子供たちの中には先ほど私が検診をした子も沢山いた。

周囲を見ると左には濁流が流れる大きな川。そこには大きな石がゴロゴロとしている。ここは砕石所となっており川岸ギリギリで住民たちが働いていた。

右手には断崖絶壁の山肌がありそのわずか数メートル幅を山頂に向かって竹でできた家々が立ち並んでいる。

私はあるお宅にお邪魔した。突然の来訪を快く承諾してくださり、私はお礼に歯ブラシやタオル、固形石鹸などを束にした衛生キッドをプレゼントした。

中に入ると岩そのものを家の壁とし、薄暗く電気も水道もガスもない。水は大きなバケツに雨水を溜め生活用水として使い、ガスの代わりに炭で料理をする。壊れそうな竹のハシゴを上ると二階には小さな寝床が一つ。そして玄関奥の部屋に一人の少女が寝ていた。脳性麻痺によって歩行が困難な少女だという。

私はお礼を言い、家を後にした。彼らは私に言った。「先生歯ブラシありがとうございます。」私は言いようのない気持ちになりながら「元気でいて下さい」と一言言うのが精一杯だった。

全ての治療が終わった。なんと事前に治療を希望されていた患者 362 人全ての治療をすることができた。勿論そのすべてが満足いくものではないかもしれない。しかし、一人ひとり患者の主訴を聞き、話し合い、そしてこの場所で私たちが今できる精一杯の治療を行った。

器材が片づけられ、ハロアルメンバー、そして現地チーム、警備のメンバー、全員で記念写真を撮った。ある兵士が私に言った。「先生、ありがとうございます。日本のボランティアチームの素晴らしい活動を護衛できたのは私たちの誇りです。」私は彼らに言った。「私たちが無事に活動を終えたのはあなたたちのお陰です。ありがとう。」
私たちは固い握手をして別れを告げた。

フィリピン・パヤタス地区。15 年前、私が初めて団長になり不安に駆られながら活動をしたこの場所は、今では多くの仲間の支えとボランティアという無償の奉仕に集う人達の優しさや力強さに更なる感謝を抱かせてくれた場所だった。

6 月 9 日

場所：Paraiso Complex Carmen St. Tondo Manila

かつてのゴミの街　トンド地区

マニラから車で約 40 分。ここはかつて東洋最大のスラム「スモーキーマウンテン」が存在したトンド地区。

1954 年からマニラ市近郊の都市の焼却されないゴミの投棄場となり一日約 3000 トンのゴミが毎日運ばれ大きなゴミの山を無数に形成していた。そしてそのゴミを拾いお金に換金をして生活をするスカベンジャーが最大 3 万人以上の集落を作っていたが、1995 年政府はこの投棄場を「フィリピンの恥部」と認識し、閉鎖に踏み切り、前日に活動を行ったパヤタス・スモーキーヴァレーへと移転させた。しかし、閉鎖後も多くの住民がゴミ山に残り生活を続ける中、現在 10,000 人の集落を形成している。
ここでの一日の平均収入は 575 ペソ。マニラの最低賃金とされているが、その収入を常時得られる人たちは一握りだろう。

「暑さとの闘い」

今回もバランガイの中央に新設されたバスケットコートで行った。
真新しい外壁と床に傷がつかないようにシートがかかっていた。

しかし、全ての工事が終わっていないため天井に近い外壁はまだ雨よけのシートがかかっていた。これが全ての風の出入りを妨げ、凄まじく暑い。何もしていなくても立っているだけで大粒の汗をかく。現地チームが急いで屋外扇風機を用意したが、台数が足りず各ブースの先生方は本当に大変だったろう。

私の検診ブースも然り。全く風が流れない。それを見たメンバーが扇風機を用意してくれたが、検診を待つ患者さんたちを見ると、皆、暑さを我慢しながら２時間以上前からずっと座っている。私は彼らにこそ扇風機を向けてもらうようにお願いをしてタオル片手に検診を始めた。

治療が始まった。

皆タオルを鉢巻のようにしたり、首に巻いたり、この暑さと必死に戦いながら目の前の患者の治療、そして与えられた自分の役割を頑張ってくれている。

しかし、やはり体力の消耗は大変なものだ。日本とはまるで違う環境で治療を続けるのは並大抵の過酷さではない。そんな時お互いが無理をせず、声を掛け合い、時に私や現地統括責任者の今西先生がサポートについて治療を続けていく。

歯科医師だけではない。全てのメンバーが流れる汗を拭うことなく、乱れる髪を整えるわけでもなく、たった１本の歯ブラシさえも買うことができず、わずかな生活物資の支援をずっと心待ちにしてくれているスラムの人達のために一生懸命頑張ってくれていた。

「心を鬼にして」

私の検診ブースに一人の男の子が来た。

18 歳の青年だ。私にカルテを見せると彼は突然涙ぐんだ。私は彼にどうしたのか尋ねると、彼は一言「恥ずかしい。」と言った。聞くとあまりにも口の中がひどく、他の住民たちに見られるのが恥ずかしいという。

実はこの検診ブース。患者は私の目の前に座るが、お口を開けると私の後ろで待っている他の住民にその様子が少し見てしまう。そのため彼は自分のお口の中を見られるのが恥ずかしいと言っていたのだ。

私はそれならば立ち位置を交換し、誰にも見られないように検診するよ、と説明をして彼のお口の中を見た。

鏡を入れた瞬間私は言葉を失った。私は今まで数百人、数千人のフィリピンの方のお口を診て来た。しかし、彼の年齢を考えてもこれ以上の重度の虫歯を見たことがなかったからだ。

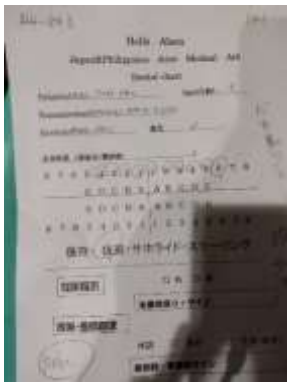
私は尋ねた。「今までどうしていたの？」彼は言った。「私には 6 人の兄弟がいます。私は長男で父親はいません。」「私はずっと町で働いて兄弟を食べさせなければならない。だから病院にも行くことができず、ずっと我慢してきました。」「しかし、少しお金が貯まったので入れ歯を作りたい。そのためには上の全ての虫歯を抜かなければならないと先生に言われた。」「でも歯を抜くお金が無く、ずっとチャンスを待っていました。」

フィリピンでは入れ歯を作るには約 6,000 ペソ～20,000 ペソの費用が掛かる。一日の収入がわずか 300 ペソ～400 ペソの彼らにとっては到底治療を受けることはできない。更に、「部分入れ歯」は「全ての歯がない総義歯」と比べて製作が難しいようで更に費用が掛かる。そのためまだ痛みのない虫歯や時に健康な歯でさえ、入れ歯をつくるためにあえて抜歯をする。しかし、それには更に抜歯の費用が必要で 1 本の歯を抜くのに 500～800 ペソ、一日の収入分の治療費が加算されてしまう。

私は彼の希望する抜歯部位を聞いた。その数、上の歯 10 本。

私は沈黙した。そして彼に健康な歯まで抜くのはダメな事を伝えたが、彼は涙ながらにこれまでの事情を話しながら、どうしても抜いて欲しいと懇願する。そしてこの歯を抜いてくれれば新しい入れ歯を作り、友達に馬鹿にされず、皆の前で話すこともできる

と言った。
　私は心を鬼にした。
　そして彼の体調、健康状態を確認し、震える手を抑えながらカルテに 10 本の抜歯を指示した。そして担当する先生へメッセージを書いた。「麻酔量に注意し、心を鬼にして」と。



　彼はカルテを受け取ると嬉しそうに抜歯ブースに向かって行った。私はその背中を見つめながら自分の診断によって彼のこれからの人生が大きく変わり、そしてこれが本当に正しいことなのかを自問自答していた。しかしその答えが出ぬまま彼は大勢の患者の雑踏へ消えて行った。
　18 歳の青年と出会った。私の息子と変わらぬ青年は今日 10 本の歯を失う。心を鬼にすることなど到底できない。家族の為に学校に行くことをやめ、ずっと兄弟たちを養ってきた彼にとって私たちの治療は確かに希望の治療となっただろう。しかし、私には言いようのない悲しみと虚無感しか残らない。そして 17 年間ずっとこの思いを抱き続きながらこれからもスラムでの支援を続けていく。
　数時間後、私は偶然トイレの前で先ほどの青年とあった。彼は血の付いたガーゼを噛みながら私の所にやってきてこう言った。
「先生、本当にありがとう。」私は涙を堪えながら彼の手を握り「頑張って」と伝えるだけが精一杯だった。

「全ては患者の笑顔のために」

　3 年ぶりとなった現地活動も終わろうとしていた。しかし、実は入れ歯製作ブースだけはまだ終わらない。これは製作工程や時間の関係上どうしても予定時間には終了しなかったからだ。
　私は会長、現地統括責任者とも相談し、私を含め数名だけは残り最後まで治療を終えてホテルに戻ることになった。勿論、これには賛否があるだろう。しかし、もう二度と会うことができない患者、そして彼らにとってあまりにも高価な入れ歯は今を逃せば一生手にすることはできない。ここで痛みや不具合があればそれを治す手立てもないのだ。

私たちは念入りに入れ歯の調整をし、そしてついに完成をした。

患者たちの嬉しそうな笑顔・・・。粉まみれの体も、汗の滴る頬も、そして全身の疲れもこの笑顔の前に全て吹き飛んでしまう。私たちは最後に彼らと記念の写真を撮った。

17 年前、会長が言った。「全てはフィリピンの人達の笑顔のために」

現地チームのリーダーが私たちをホテルに送ってくれるようだ。彼は言った。

「セキ、今年も素晴らしい活動をありがとう。」私は伝えた。「これも全て皆さんのお蔭、そして私たちを受け入れてくれるスラムの人達のお蔭、もう一つ。日本で私たちを支えてくれるすべの人達のお蔭です。」

3 年ぶりの活動それは沢山の感動の中に一生忘れることができない痛みを再び抱かせた活動だった・・・。

6 月 10 日　帰国日　物資配布活動

場所：Brgy 704　Zone 77　District V San Andres Covered Court

帰国日。

空港までの途中のバランガイで 200 人分の物資配布を行う。外は朝から雨。

バスが会場に到着するとすでにバスケットコートには数百人の住民が物資配布を待ちわびていた。到着すると大人も子供も大歓迎で私たちを受け入れてくれた。

雨の中、すでに 1 時間以上コートで私たちを待っている。

ここは 13,000 人の住民が暮らしうち 33%が 12 歳未満の子供たちだ。そして 5 人に 1 人は学校に通うことはできず、物乞いや子供が出来る仕事を探しながら暮らしている。

バランガイのリーダーにこの地区で今必要な物は何かを尋ねると彼は言った。

「コロナのために子供たちは学校に通うことができませんでした。そしてそのまま貧しい家庭の子供たちは学校に戻らず収入の減った家計を助けるために仕事を手伝っています。」「この地区には再び教育が必要です。そのためには全ての子供たちに平等にノートや鉛筆などの文房具を与えることができれば本当に幸せです。」

私たちは 200 人分の物資を直接手渡し、数百人分の物資を現地チームに委託し会場を後にした。

私がバスに向かっていると一人の老婆と出会った。彼女は嬉しそうに私に物資を見せ、「日本人の皆さんにとても感謝します。」と言ってくれた。

3 年ぶりのハローアルソン・フィリピン医療ボランティア現地活動が終わった。

感謝を込めて

2019 年 12 月。中国武漢市で初めて確認された新型ウイルス感染症は瞬く間に全世界へと拡大した。私たちはこれを COVID-19　通称「コロナ」と呼んだ。

未知なるウイルスは世界中の人々を恐怖と不安に陥れ、多くの尊い命を奪い今なお苦しみや悲しみに暮れる人々がいる。

私たちは今まで当たり前のように思えた事すべてが実は当たり前でないことを知り、「新しい生活」「新しい価値観」への変化が求められた。

私たちの活動ハローアルソン・フィリピン医療ボランティアも国内外の情勢を鑑み、

2 年間の活動延期を余儀なくされた。
　しかし、人間はこの未知なる敵に対し、勇気と知恵を持ち、そして未来への力を信じ、様々な分野と多くの人達の努力と我慢により、「共生」という新たな道を歩み始めた。
　そんな中、約 3 年ぶりとなるハロアル現地活動の再開は 2023 年の 1 月、会長林春二先生の決断により、いくつかの条件を設けるものの、世界中の人々が前を向き始めたように私たちもこのような状況でもっとも苦しむスラムの人達のために行動を起こす時に来たと決断され、現地チームとの密な連携のもと 2023 年 6 月 7 日を復活の日とした。
　このような状況下において現地参加をして下さった皆さん、その決断を尊重し支えて下さったご家族、会社、そして 3 名の高校生ならびにご父兄、学校関係者の皆さまに心から感謝申し上げたい。
　また、延期となっている間も物資の協力を継続して下さり、私たちの活動を信じ、応援して下さった全国の皆さんに心からお礼を申し上げたい。

　3 年ぶりに訪れたスラムは私たちに沢山のことを投げかけ、多くのことを学ばせてくれた。
　突然来た私たち日本人に対し、絶大な信頼と明るく大きな寛容さで迎え入れ、私たちの力不足により「歯」という人間にとってとても大切な体の一部を失わざるを得ない状況でも心から感謝してくれた。
　その笑顔は私たちにとってこの活動の意義と喜びを感じさせると共に、私たちの判断、治療が本当に正しかったのだろうか、という自問自答を常に与えて来た。
　しかし、それでも嬉しそうに時には涙を流しながら患者と抱擁する各ブースのメンバーを見ていると、ボランティアには正解はなく、ただ目の前の人達の思いに寄り添い、支え合い、そして認め合うことだと改めて感じた。
　今、まさに皆さんの歯ブラシが国境を越え、人種を超え、ボランティアのバトンとなって全てを一つにした。
　私は帰国の飛行機で今回の活動を振り返り、やはりこのハロアルの活動は本当に楽しいと純粋に喜びを感じていると、隣に座る現地統括責任者の今西先生も同じように思ったと言った。
　そして全参加者と共に無事に帰国し、皆が「楽しかった」と言って下さった時、私は心から全ての人達へ感謝せずにはいられなかった。

「ボランティアは富める者が貧する者に行う行為ではなく、お互いに足りないものをお互いが分け合い、認め合い、支え合う行為」

15 年前、私が初めて団長になった時、参加者の皆さんに伝えた言葉だ。
私はそれを今、自分自身にもう一度投げかけた。そして誓った。
また来年、再びあの地で更なる活動のために一、歯科医師として、そして一人の人間として、今日生きることにも困窮し、たった 1 本の歯ブラシに満面の笑みで喜んでくれる人々のために全てを捧げて頑張ろうと思う。
私がそう思えるのも皆さんがいつもこの活動を暖かくご支援して下さり、心を紡ぎ合わせて下さるお陰だ。

最後に謹んで皆さまの「優しさ」に心から感謝申し上げます。
これからも皆さんの思いを裏切ることなく一生懸命頑張ります。
どうか末永くご協力をよろしくお願いいたします。

2024 年度　ハローアルソン・フィリピン医療を支える会

団長　　関口　敬人